



夢話・参
使命感



大城拓人

Published by Takuto Oshiro
Copyright © 2010 Takuto Oshiro All right reserved.

使命感

その日、どうしてか、私は目覚めた瞬間から圧倒的に不機嫌、いや、正しくは逃げ場のない寂寥感に襲われていた。

なんだろうこれは？

欠伸をしても伸びをしても、それは全く払拭されなかった。

堪らず、一歩、私は自分の家から出た。

晴れている、良く晴れている。

鋭い日差し。私の好きな季節、晩夏の爽やかな早朝の陽の光が、見慣れた庭の、草の上に降り注いでいた。

三、四人の子供達が相変わらず無邪気な弾けた笑い声を奏で、家の前を通り掛り、私に挨拶をした。

さっと顔の筋肉を綻ばせ、私も普段通りの朝の挨拶を、彼らに送った。

子供達は去って行った。

次に隣に住む老夫婦が私に声を掛けて来た。

これもいつものこと。可能な限り愛想良く、私は彼らに対して受け答えた。

見慣れている、そう、どこもかしこも昨日と同じ、見慣れた色、形、風景が眼の前に広がっていたのだ。

なのに、何故だ？ 何だろう、この欠落感は？

どうも自分は、そこにいない、……ここにはいけない気が無尽蔵に沸き起こり、私の胸を潰した。

老夫婦が去った後、私は一口、水を飲んだ。

不味い。

こんな不味い水は初めてだった。

腐っている訳でもなかりょうに。

とくん、とくん、と全身の脈が波打つ。

寂寥感は、もう既に、どうしようもない焦燥感へと変貌していた。

私は眼を見張った。苦く潤った唾を呑み込み、耳にも神経を集中させた。

警戒した。

この正体不明の不安はどこからくるのか、探ろうとした。

場合によっては家の者に知らせなくてはならない。この私が感じている危機感を、胸騒ぎを！
それが私の使命であるからだ。

暫し、私は自分の家の前を往ったり来たりした。

低い音。

私は察し、はっと庭の方に眼を遣った。

雀がいない、一羽も、いなかった。

莫迦な！

遙か上空から、今まで聞いたものと明らかに種類の違う、飛行機のものとは思えない音が、信じられない速度で我々のいるところに迫って来ていた。

あらん限りの声を、私は上げた。自分でも呆れる程狂った声だ。しかし、家の者を呼んだ、家の者に、この事態を私の出来る唯一の方法で知らせた。

私だけではなく、街のあちらこちらにいる私の仲間達も一斉にその使命を果たさんと声を張り上げた。

瞬く間に、街中が私達の声に包まれた。

「うるさい！」、窓が開き、漸く家の者、……主人が出て来た。

「ねえ、どうしたの？」、主人の細君も顔を出した。彼女の腕に包まった赤ん坊も、必死に泣き叫んでいた。

「一体、何だ、おい、どうしちまったっていうんだ！」

主人の家ばかりではない、どの家も、私の仲間がいる家はどこも、既に似たような恐慌状態に陥っていた。

「静かにしろ！ ハウス、ハウス！」

主人は私に向かって手を振り、絶叫した。

その指示は聞こえる。意味は充分に解る。だが、吠えた。

今回ばかりは主人に従う訳にはいかない。このことが原因でぶたれても、食事を抜きにされても構わない。

吠えた。

私は吠えた。

私の使命は危機を知らせ、主人達の生活を守ることなのだ。

白い熱と光が我々の体を呑み込み、建物から細菌に至るまで全てを消し去ったのは、主人達、人間の時間概念で換算すると、それから約二十秒後のことだった。

(終)